

(特別支援学校版「学力向上実行プラン」様式)

令和6年度 阿南支援学校ひわさ分校「学力向上実行プラン」

阿南支援学校長 西 直子

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	西 直子 田中 敦子
学力向上推進員	教諭(教務課長)	渋谷 恵理子
委員	教諭(小・中学部長) 教諭(高等部長) 教諭(支援課長)	森本 春輝 伊井 敏 市川 貴雄

2 学力・学習状況における現状分析, 目標等

【3つの視点】

- (1)基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3)主体的に学習に取り組む態度の育成

(小・中学部) 幼児児童生徒の状況		
よさ	学習や作業など、各個人に応じたスケジュールや手順書を手がかりに落ち着いて活動に参加し取り組むことができている。小学部に新入生が入ってきたことで、上学年の児童生徒が見本を示したり、教えたりする場面が増え、お互いが意識し合い、良い人間関係の形成ができている。少人数であるため、一人あたりに対しての授業時間の確保が十分にでき、自立に向けた学習の機会を多く持つことができている。	課題 小学部の在籍数が増えた一方、中学部の在籍数が1名となり、全体数としては、昨年度より減っている。少人数ゆえに、協力や助け合いなどコミュニケーション力を培うための授業の展開が難しくなっている。全校集会や総合的な学習の時間などを通して、学部を越えた友だちや教員と関わることで関わる幅を広げている。少人数の良さを活かした授業を行い、自主的に活動したり、主体的に課題に取り組んだりといった、将来の自立のための学習やスキルの定着を目指していきたい。
具体的目標(目指す子どもの姿)	成果指標	達成状況
学習活動を通して、基本的なコミュニケーションスキルを身につける。	個別の指導計画において、コミュニケーションに関する学期目標の内、とくに重要とする目標を各個人が1個選定し、その評価が「達成」または「ほぼ達成」となる割合が学部全体で80%以上となる。	各児童生徒につき重要目標を1個選定することができた。前期目標の達成割合は、小学部3名が「達成」となり100%、中学部1名は「進歩あり」で0%であった。後期は、中学部の在籍がなくなり、小学部3名の評価がすべて「達成」「ほぼ達成」となり100%であった。 ----- 評価 B
具体的方策(教員の取組)	取組指標	取組状況
・保護者懇談等で保護者や本人の将来に向けてのニーズを聞き取り、個別の教育支援計画(支援計画表)に反映させる。 ・個別の指導計画の学期目標にコミュニケーションに関する目標を設定する。その中からとくに重要とするものを選定し、学部で共有する。 ・個別の指導計画に関するケース会で目標達成のための手立ての確認をし、共有する。 ・指導の経過について、進捗状況等を見直しケース会等で報告し、指導について検討したり共通理解を図ったりする。 ・設定した目標に対する評価を行う。 ----- * 中間期の見直し	・個別の指導計画の前期、後期目標にコミュニケーションに関する目標を設定し、とくに重要な目標1個を選定する。 ・個別の指導計画に関するケース会及び見直しケース会を年間5回以上行う。	・前期、後期ともコミュニケーションに関する目標の中から各1個ずつ重要な目標を選定することができた。 ・個別の指導計画に関するケース会及び見直しケース会を前期に3回、後期に2回実施し、合わせて5回以上行うことができた。
達成状況を踏まえた改善事項		
在籍している児童生徒の実態からコミュニケーションスキルの向上は重要かつ必要性が高いものであったと思われる。各担任が児童生徒の実態に合った目標を立て、学部全体で共有し取り組むことができた。達成状況としては、前期での中学部の生徒の進歩ありについては、欠席が多く実施回数がとれなかったことが一つの要因であると言える。後期からは、中学部の在籍がなくなり、小学部だけの取り組みとなった。小学部については、設定した目標の評価が児童全員「達成」または「ほぼ達成」となっているが、場面や人など環境が変わるとできないケースもあったため、引き続き場面や人を変えて指導を行っていく必要がある。		